

文化接触説としての異文化解釈学

——権左武志『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』を読む——

寄 川 条 路

目 次

はじめに

- 第一節 歴史における理性——西洋中心主義と文化相対主義のあいだで——
 - 第二節 法哲学講義における国家論——西洋政治思想史の文脈のなかで——
 - 第三節 ヘブライズムとヘレニズムとの融合——宗教史の文脈のなかで——
- おわりに

はじめに

本稿は、ヘーゲル哲学を文化接触説として読み解こうとする権左武志『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』（岩波書店、二〇一〇年）から、どのようなヘーゲル像が生まれてくるのかを検証するものである。

まずは、歴史哲学の視点で、本書の説く発展史研究から文化接触説への転換を取り上げ、つぎに、国制史の文脈で、文化接触説のもつ際

だった特徴を抜き出していく。そして、宗教史の文脈で、文化接触説のもつ意義とその独自性を見定めていく。これによって本稿は、文化接触説としてヘーゲル哲学を読み解こうとする本書の試みを受けて、そこから異文化解釈学の可能性を探ろうとするものである。

以下、権左武志『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』を読みながら、本書の要点をまとめつつ、逐一それに考察を加えていくことにしたい。

第一節 歴史における理性

——西洋中心主義と文化相対主義のあいだで——

本書の第一部「ヘーゲル歴史哲学の成立とその背景」は、歴史のなかを理性が貫き通すというヘーゲルの歴史観に焦点を合わせて、「歴史における理性」という考え方が成立する過程と、その背景を解き明かしていく。

まず第一章において、「〈歴史における理性〉は人類に対する普遍妥当性を要求できるか？」という大きな問いを立て、世界史のなかでのヘーゲル歴史哲学の成立を、神学的・国制史的背景から探っていく。

つぎに第二章において、「〈歴史における理性〉はいかにしてヨーロッパで実現されたか？」というより具体的な問いを立て直し、西洋思想史のなかでのヘーゲル歴史哲学を、単純な発展段階論的な歴史観から解放していく。そして第三章「世俗化運動としてのヨーロッパ近代」において、一八三〇年のヘーゲル歴史哲学講義から、近代ヨーロッパにおける自由の実現過程とその基礎づけを丹念に追っていく。

これによって著者は、第一部では、ヘーゲル歴史哲学講義のテクストを一八二二年の最初の講義録から一八三〇年の最後の講義録にまでいったんは解体して、そこからヘーゲル歴史哲学の成立段階とその主導機（ライトモチーフ）を再構築していく。以下に、本書の第一部で再現されたヘーゲル歴史哲学の成立要件を挙げておく。

第一章では、ヘーゲル哲学において歴史の究極目的をなすという「歴史における理性」が取り上げられ、それが、キリスト教の三位一体説をモデルとした「精神」概念により構想されていることを明らかにする。それとともに、三位一体説で示された精神の自己認識と自由の意識は、オリエント・ギリシア文化という、キリスト教文化とは異なる他者との対話による「地平の融合」の所産であることが指摘される。

第二章では、キリスト教文化を受け継ぐゲルマン世界は、宗教史の文脈のなかでは、精神が自由を実現していく自覚の道のであるキリ

スト教原理の受肉の過程として把握されるが、その一方で、国制史の文脈では、西洋に特有な封建制秩序を克服して統一的な主権国家に移行する過程として把握される。

第三章では、このようにして、宗教改革とフランス革命という宗教史的・国制史的な関連が、プロテスタントのプロイセンにおいて、理性と宗教の和解という形で継承されていくのを見る。

以上が、三つの章からなる第一部の要約である。この要約を踏まえて、本書のもつ解釈上の特徴を著者の立論に沿いながら検討していく。

たしかにわたしたちは、歴史を過去の出来事として語るとき、すでにある特定の視点に立つて解釈している。しかし、わたしたちが立っている視点に、他者の視点から反省を加え、自分自身の地平を拡張できるならば、歴史は別の視点から解釈し直すことができるのではないだろうか。著者はこのような可能性を示唆する。

もしそれが可能であれば、世界史とは、世界精神が時間に従って順次にたどっていく単線的な発展過程などではなく、歴史における理性とは、特定の視点から歴史を貫き通す普遍妥当性を描き出すのでもないだろう。そうではなく、人類の歴史とはむしろ、それぞれの文化によって視点も違ってくるのだとすれば、異なる文化圏が衝突したり融合したりしながら、たがいに影響を及ぼし合う過程として理解されなければならない。世界史とは、文化接触によって引き起こされるさまざまな出来事となるのである。

これではまるで、ハンス・ゲオルク・ガダマーの解釈学の基本理念

「地平の融合」を、歴史理解に適応したものといえよう。ガダマー自身は、伝統的な作品との対話という解釈学の文脈で地平の融合を説いていたのだが、本書はこれを、異なる文化との対話という文化接触論の文脈へと転用していく。

そうであれば、異文化との積極的な対話を説く文化接触説は、伝統を实体化してしまうという解釈学への批判に応えることができるかもしれない。それは、あらゆる文化に等しい価値を認めるマルチカルチュラリズムにとどまることなく、自分のなかに価値基準を置くエスノセントリズムにもとどまることもないだろう。むしろ、チャールズ・テイラーを引き合いに出すまでもなく、文化相対主義と西洋中心主義のあいだの「中間の道」として、どちらの方向にも開かれた態度を取ることができるのかもしれない。このように、文化接触説のもつ可能性に著者は大きな期待を寄せる。

だがこれは、哲学的な言い回しを使えば、自分が世界に属していることを自覚しながらも、自己対象化を通じて世界を内側から超えようとする、超越論的な態度ともいえよう。自己関係的でありながら自己超越的でもある自己意識の構造からすれば、ヘーゲルの歴史観は、認識主体が対象の外部に立って眺めるものでもなければ、自分の属する世界に制約されているというものでもない。むしろそれは、自分が属する世界を相対化しつつも、それを内側から乗り越えようとする主体的な働きだといえよう。

ヘーゲルの歴史哲学は、時間系列に従った単線的な発展段階説を唱えるのではなく、むしろ、同一空間に並存する文化接触説という別

の歴史解釈の可能性を示すものへと読み替えられていく。発展段階説から文化接触説へのこのような解釈替えは、西洋中心主義に対する多文化主義の挑戦と呼んでよいだろう。

著者による発展段階説から文化接触説への解釈替えにより、本書が提起したもっとも大きな問題は、ヘーゲルの歴史哲学が、「発展」という時間的な経緯のみに注目していたのではなく、「風土」という空間的・地理的状况などの自然条件をも重視していたという点である。

ヘーゲルによれば、世界史の歩みは、時間的に継起する必然的な順序に従うだけではなく、空間的にも限定された一定の地理的位置を持つのであって、地理的な土台が、世界史の舞台に登場する国民の性格を作り上げる、というものであった。

こうした風土論は、ひょっとすると、国民文化論を正当化する機能を果たしていくのではないだろうか。だが、著者が見るところでは、ヘーゲルがここで問題にしているのは、自国の文化がもつ独自性への賞賛というよりも、むしろ、他国民との積極的な「異文化交流」への眼差しなのだという。しかもそれは、正確に言えば、アジアが異文化との交流に閉ざされた姿勢を取ってきたのに対し、ヨーロッパはたえず、地中海を介して異民族との開かれたコミュニケーションを保ち続けてきたということなのである。

ヘーゲルは地理的な文脈のなかで、地中海をアジアとヨーロッパを結びつける「東洋と西洋の結合点」と呼んで、世界全体を統合するような「精神的な場所」として特徴づけている。もしそうであれば、地中海は異質な文化が接触し衝突し合う世界史の中心舞台となる。文化

接触説によるこのような理解はまさに、二つの文化が会うことによってより高い地平を獲得するという、ガダマーの説く「地平の融合」の風土論にほかならない。

ここで著者は、地理的な理解を宗教史のなかへと持ち込んでいく。そこから興味深い歴史的事実が見えてくる。すなわちそれは、キリスト教世界を生んだのは西洋ヨーロッパだが、より高度な精神的な起源は東洋オリエントにある、ということである。宗教史の文脈のなかでは、ローマ人はキリスト教をオリエントから受け取ったのであるから、西洋のキリスト教世界はオリエントに起源を持つことになるわけである。

このさい、本書のなかで注目されるのは、異質な要素を取り入れ、これを自分の手で加工して再創造したギリシア文化のもつ自由な精神である。ギリシア文化の自由な精神とは、異質的なものを積極的に受け入れることではじめて成立するような独自の文化のことだからである。

だが、地平を拡大していく自由な精神は、ギリシアに限定されるものではない。そうではなく精神の自由は、あらゆる地域で歴史的に繰り返される文化接触の出来事であるはずだ。著者が「文化形成」(Bildung)と呼ぶものも、実のところは、国民文化ともいふべき「教養教育」のことであろうし、今日のことばでいえば、自国の文化を超えて異文化の形成へと伝播するグローバル化のことであろう。それだからこそ、ヘーゲルが語るように、ドイツ人はローマ人により教育形成され、ローマ人はギリシア人により教育形成された、

といえるのである。

たしかに、わたしたちの文化は、外部から異質なものを受け取り、受け取ったものを自分たちの内部で再創造することにより、新しいものを作り出していく。これが国民文化の形成と呼ばれるものである。

ここでは、「地平の融合」というガダマー解釈学の基本概念は、古典作品との対話という垂直的次元にとどめ置かれるのではなく、文化接触による異文化との対話という水平的次元へと転用されている。

他者という異質な文化を外部から取り入れ、これに手を加えていくことで加工し、新たな文化を創造していくとき、そこには、他者に開かれた開放的な精神と、外来文化を受容して加工していくという創造的な精神とが、ともに必要とされる。なぜなら、本書のなかで著者が注意しているように、一方だけでは外来思想の輸入にとどまり、他方だけでは伝統文化の継承にとどまるからである。したがってそこには、異質な文化圏がたがい認め合う相互承認が要求されているともいえるよう。

第二節 法哲学講義における国家論

——西洋政治思想史の文脈のなかで——

本書の第二部「ヘーゲル国家論と法哲学講義」は、西洋政治思想史という文脈のなかに、ヘーゲル法哲学講義の国家論を位置づけ、国制史という観点から近代国家が成立する過程を描き出していく。全体の構成はつぎのようになっている。

第四章「帝国の崩壊、ライン同盟改革と国家主権の問題」は、ヘーゲル主権理論の形成とその歴史的背景を探り、第五章「西欧政治思想におけるヘーゲルの国家論」は、西欧政治思想史の二つの起源にまでさかのぼり、そのなかにヘーゲル国家論を位置づける。第六章「ヘーゲル法哲学講義をめぐる近年ドイツの論争」では、ヘーゲルの法哲学をめぐる戦後の解釈動向を紹介しながら、一九七〇年代から公刊されはじめたヘーゲルの『法哲学講義』をめぐる論争を二つに分けて説明し、さらに、その後の論争の経過にも触れている。

では、ヘーゲル『法哲学講義』をめぐる近年の論争を踏まえただえで、第二部の内容を見ていくことにしよう。ここでは、一八二〇年のヘーゲルの著書『法哲学綱要』にいたる国家理論の成立過程を、それ以前のヘーゲルの講義録『法哲学講義』と対比しつつ、西洋政治思想史の文脈のなかで解明していく。

まず、第四章では、一八〇一／〇二年の『ドイツ国制論』から一八一九年の『法哲学講義』までのヘーゲルの主権理論と、国家と市民社会の二分法が形成される過程を、ヘーゲルが経験したドイツ帝国の解体やライン同盟の改革という時代体験から再構成していく。そしてこの過程を、主権概念の受容とその立憲主義への変容という一七世紀以来のドイツ国制史の文脈に位置づけていく。そこから導き出される著者の独創的な解釈は、ライン同盟こそドイツ連邦共和国の先駆的模式をなす、という結論に見て取れる。

つぎに、第五章では、一八二〇年のヘーゲルの著書『法哲学綱要』にある国家論が、一方では、古代ギリシアの共和主義理念をプロテス

タンティズムの主体性原理を媒介にして脱共和主義化したことを、しかし他方では、近代に形成された主権概念を中世以来の立憲主義的な伝統と和解させたことを、明らかにする。このように本章では、著者の説く文化接触説が国制史的な文脈のなかに適用されている。

そして、第六章では、ヘーゲルの政治思想についての研究動向を概観したうえで、一九七〇年代から公刊された『法哲学講義』をもとにして、なかでもとくに一八一七年の第一回講義と一八一九年の第三回講義をめぐる論争に注目しながら、伝記的記述・理論的解釈・発展史的解釈という三つの点から考察を進めていく。さらに付論では、新たに発見された別の筆記録から、テキスト資料を解釈するうえでの問題点を指摘している。

本章の考察によって明らかにされた点を、以下に簡潔にまとめておくことにしよう。

本章の狙いは、一八二〇年のヘーゲルの著書『法哲学綱要』に先だつて、一八〇一／〇二年の草稿『ドイツ国制論』から一八一九年の講義録『法哲学講義』までのテキスト資料にもとづいて、ヘーゲルの国家論を再構成していくことである。この試みは、ヘーゲルの法哲学における国家像を、ヨーロッパ政治思想史というプラネタリウムの円天井のような言語空間に映し出して、他の思想との関連を星座の配置図にも似た思想的な見取り図のなかに描き出そうとするものである。このように本章は、学問上の異文化接触説を唱えることによって、発展史研究からコンステレーション研究への転換を説き、そしてこれによって、ヘーゲルの国家論をドイツ観念論という閉ざされた言語体系から

解き放とうとする。

これが著者のもくろみなのであるが、果たしてこの試みは成功したのであろうか。ひょっとすると、著者のなかには、ドイツ観念論は閉ざされた言語体系であるが、ヨーロッパ政治思想は開かれた言語体系なのだという前提があって、ドイツ観念論を政治思想史という別の言語体系へと移し替えようとしているのであろうか。それともむしろ、著者は、哲学のことばを政治のことばへとつなぎ、政治のことばを哲学のことばへとつなぐことによって、異なる学問からなる学際的な文化接触を唱えているのであろうか。哲学と政治と歴史が錯綜する文化接触のコラボレーションが、いったい何をもたらすのかを、最後に見ておこう。

思想の配置図を描き出すコンステレーション研究は、ヘーゲル政治思想をその内部に押しとどめるのではなく、西洋政治思想史というより大きな文脈のなかへと解き放っていく。それは、政治のなかに哲学を解消するのでもなければ、哲学のなかに政治を解消するのでもない。そうではなくて、過去のヘーゲル解釈に見られた哲学か政治かという不毛な二者択一を脱して、哲学と政治のあいだに、そしてドイツ観念論とヨーロッパ精神史のあいだに、対話の領域を作り出そうする試みである。これはまさに、著者が本書のなかで説く、敵対する二つの解釈方向を統合する文化接触説を、国制史という学問研究の場面に適応したものである、といってもよいであろう。

第三節 ヘブライズムとヘレニズムとの融合

——宗教史の文脈のなかで——

本書の第三部「初期ヘーゲルの思想形成」は、これまでの発展史研究の成果を踏まえて、一七九〇年代から一八〇〇年代までの初期ヘーゲルの思想形成を、異文化の創造的継承という文化接触説の視点からとらえ直して再構成していく。

第七章では、初期ヘーゲルの政治思想を、フランス革命に触発されて古代共和主義を再生しようとする試みとして理解する。ヘルダーリン合一哲学の受容により、ヘーゲルのキリスト教理解に変化が起こるのみならず、古代ギリシア精神との出会いによって、「結合と非結合の結合」というヘーゲル独自の思想が形成されるのを見る。

第八章では、初期ヘーゲルの絶対者概念を、「同一性と非同一次性」という独特の形式で表現し、この表現形式を、プロテスタント原理とギリシア精神、ヘブライズムとヘレニズムという異質な二つの文化的伝統を融合するものと理解する。

では、本書の叙述に沿いながら、初期ヘーゲルの思想形成において、古代のギリシア精神と近代のプロテスタンティズムとの文化接触が、どのようなものであったのかを見ていこう。

著者の理解に従えば、古代ギリシア精神は、共和主義理念を体现する古代ポリスとなり、近代プロテスタンティズムは、そこに自己意識という新たな原理を持ち込むものとなる。このように異質な二つの原

理による文化接触として、ヨーロッパ精神史が解き明かされる。

しかしそうであっても、ヨーロッパ精神史という大きな歴史的文脈のなかで見れば、キリスト教の精神もユダヤ教の精神の延長線上で理解されるから、古代ポリスの共和制を支えていたヘレニズム的精神の再生として解釈される。こうして著者は、ヨーロッパ精神史のなかに、キリスト教の伝統を生かしながら、ギリシア的伝統を呼び覚ますことになる。つまり、ヨーロッパ精神史のなかでは、ヘーゲルは古代ルネサンスの精神を受け継ぐものとして特徴づけられるのである。

ここで、ヘーゲルによって「合一と分離の合一」として定式化された絶対者の表現が、ヨーロッパ精神史において何を意味するのかを見ておきたい。

ヘーゲルがヘルダーリンから受け継いだ合一哲学は、古代ギリシア精神を受け継ぐものであり、ヘレニズムの世界観はヘーゲルの抱いていた古代共和制を再建するものであった。ヘーゲルは合一哲学の立場から、絶対者を「合一と分離の合一」として特徴づけて、合一に対立する分離を批判し、分離に対立する合一を批判する。これによってヘーゲルは、古代ユダヤ教からカント哲学まで一貫するヘブライズムの精神、近代プロテスタンティズムの原理を批判していくのである。

ヘーゲルは、分離に対立する合一ではなく、「合一と分離の合一」を要求するのであり、このことは、古代のギリシア精神と近代のプロテスタンティズムの和解を目指しているともいえる。ここに著者は、一神教と多神教、ヘブライズムとヘレニズムという、ヨーロッパ精神史における二大潮流の争いを見て取る。

これを人類の歴史として見れば、文化が発展するにつれて分裂の力が増し、文化形成が進んで発展が多様になり、分裂の勢が増していくことを意味する。ヘーゲルによれば、文化形成を推し進める分裂の力は「風土」に起因しており、ヨーロッパではことのほか強かったのだという。

これを思想の歴史として見れば、西洋近代に特有の現象であり、思想の中心が、超越する神から意識する人間へと移動したことを意味している。このような理性の主体化ともいうべき合理化の過程と、そこから導き出される結末に、著者は光を当てていく。

たとえば、信仰と知性の対立は、一八〇二年の『信仰と知』でいえば、中東のパレスチナで誕生したユダヤ人のキリスト教が、異質なギリシア文化に出会ったときに生じた文化接触の産物であり、いかにして理性と信仰を両立させるかという問いであった。この問いは、西洋思想史の文脈のなかでは、神に代わって世界の中心的地位をしめた人間が、神との絆を完全に断ち切って、自立した自由な主体になりうるのか、という問いでもあった。

ヘーゲルは、思想史という観点から、西洋の近代思想を、プロテスタント的な「主観性の哲学」と名づける。ヘーゲルがこう語るとき、著者がここに見て取るのは、ヨーロッパ文化を特徴づけるヘブライズムの伝統に対して、逆に、ヘレニズムの精神こそがヨーロッパ文化の別の起源を示しうる、という解釈の可能性である。そこでは、ヘブライズムの超越神が、ヘレニズムの内在神によってとらえ直されるからである。

ヘーゲルは、ギリシアの多神教のあとに一神教の段階を置き、ユダヤ教に続いてキリスト教を把握していく。ここから、一神教と多神教という二つの文化が接触することにより、キリスト教が誕生してきたという解釈の可能性も生まれてくる。

異文化の接触からキリスト教が生まれたとする解釈は、一八〇七年の『精神現象学』の宗教章でいえば、二つの異なる文脈で、精神の自己認識を示すものである。一つは、意識する主体が実体に対して自己を二重化していく運動であり、もう一つは、神の本質が現実の人間に対して自己を啓示していく運動である。

主体に重きを置く前者は、自己意識をモデルとする超越論哲学の立場であり、実体に重きを置く後者は、三位一体説をモデルとする伝統神学の立場である。だが著者によれば、二つの方向は、相入れない二律背反をなすのではなく、両立可能である。精神の自己認識とは、神の理念の啓示であると同時に、人間自身の自己認識でもあるような、二重の意味を持つからである。

ヘーゲル哲学は、初期論文や『信仰と知』では、超越論哲学や同一哲学に対抗して、「同一性と非同一性の同一性」の哲学として定式化された。そして、この基本形式を踏まえつつ、他者のなかに自己を見る「精神」概念が、一方では、超越論的文脈で形成され、他方では、神学的文脈で受容された。そこに著者は、カントの超越論哲学やシェリングの同一哲学を乗り越えようとするヘーゲル哲学の優位を読み取るだけでなく、神学的伝統を生かして、過去の思想的伝統を現在の文脈に読み込もうとする。

西洋思想史という歴史的な文脈でこれを見れば、主観哲学や同一哲学へのヘーゲルの批判は、啓蒙主義とロマン主義という二つの思想潮流を克服し総合するものであった。これはまた、文化接触説という解釈学的な文脈では、近代プロテスタンティズムと古代ギリシア精神の接触という、異質な二つの文化を融合するものであった。

ヘーゲル哲学の特徴は、分裂と統一を対立させるのではなく、両者の一面性を廃棄することにあった。そのためにヘーゲルは、「絶対者」という概念を持ち出してきて、そのなかで両者を包摂し、アンチノミーを解決しようとした。こうした試みは、はじめは「同一性と非同一性の同一性」という弁証法的な表現形式を取り、つぎには「実体は主体である」という命題形式を取った。そしてこれが「精神」の概念となって完成するのである。

このように本書は、ヘーゲルの絶対者概念が、超越論的ならびに神学的文脈のなかで、精神概念へと発展していく過程を説明する。『精神現象学』にある精神概念を、初期ヘーゲルの主観性概念の延長線上でとらえると、ヘーゲルの思想発展の全体は、古代ギリシアへの憧れを断念して、近代プロテスタンティズムに始まる啓蒙の理念を内面化していく過程ともいえる。

著者が語るように、時代の変革期には、啓蒙主義とロマン主義のような、あるいは、ヘブライズムとヘレニズムのような、相対立する思想潮流が呼び起こされるのかもしれない。もしそうであれば、異なる二つの文化が衝突したり融合したりしながら、たがいに影響を及ぼし合うという文化接触説は、ヘーゲルの精神的軌跡にとどまらない、永

遠の予言を与えてくれるのであろう。

おわりに

最後に、著者の問題関心に沿いながら、文化接触説からヘーゲル哲学を読み解く本書の内容をまとめておこう。

二〇世紀の政治的文脈のなかでは、ナショナリズムやマルクス主義を生みだしたとされるヘーゲルの歴史哲学は、もっぱら克服すべき対象とみなされてきた。しかし、冷戦後の二一世紀になると、文明の衝突が現実のものとなるにしたがって、ヘーゲルの歴史哲学は、文明間の対話と相互理解を可能にする処方箋として読み替えられるようになった。

これを現代史のなかでとらえ返してみると、本書は、世界史が縦の線で発展していくとする発展段階説を唱えるのではなく、むしろ、人類史が横からの異文化の衝撃によるとする異文化接触説を唱えることにより、歴史を解釈するうえで別の可能性を示したものといえよう。

ヨーロッパ文明の起源は、オリエント・ギリシア・ローマの古代世界にまでさかのぼることができるが、振り返って考えてみると、西洋のキリスト教文化が、異文化を摂取し加工して成立した文化接触の所産だということも見えてくる。本書はこのように、文化接触説を世界史の発展段階説に適用して、異文化が創造的に継承されていくプロセスを再構成したものである。

著者の唱える文化接触説によれば、ヘーゲルの歴史哲学とは、異な

る文化の接触を物語る世界史であり、ヘーゲル哲学の歴史とは、ギリシア精神の再生をもくろむ革命と、一神教を守り抜こうとする強固な伝統との絶えざる葛藤の所産とみなされる。両者を組み合わせて考えるならば、伝統と革命とがせめぎ合うヘーゲル哲学の発展史こそ、異質な文化が接触して衝突した結果と見ることができる。

著者は総じて、ヘーゲル哲学の発展史を異文化の創造的継承のプロセスとしてとらえ、そこにアクチュアルな示唆を読み取ろうとする。初期ヘーゲルの思想形成に関していえば、異文化との衝突のなかに融和を、文化接触のなかに対話を読み取ろうとしているように見える。だが、そのさいに問われるのは、テキスト読解にかかわる解釈学上の問題であろう。

ヘーゲルが、時代に制約されながらも、超越者と向き合い、歴史を超えた価値を問う一方で、現代の読者は、マルチカルチュラルな視点から、ヘーゲルのテキストを読み込んでいく。そのとき、アクチュアリティーを求める読解の試みは、ヘーゲル哲学の完成した作品を読み取ることと、どのように関連するのだろうか。超越者や歴史の意味という、日本哲学が避けてきたヘーゲル哲学の核心部分を取り出そうとするのであれば、主観的な読み込みと客観的な読み取りとの関連にかかわる解釈学上の問題についても、著者の踏み込んだ考えをうかがってみたかった。

文献案内

権左武志『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』（岩波書店、二〇一〇年）。

本書は、新たに刊行されたヘーゲルの法哲学講義録を踏まえて、歴史哲学と法哲学を発展史的に読み解き、加えて文化接触説という独自の視点から、従来の政治思想史を書き換えたものである。第二三回和辻哲郎文化賞を受賞。A5判・上製・四〇四頁、二〇一〇年二月三日刊 (ISBN 978-4-00-024712-2)。

付記

本稿は、日本ヘーゲル学会第一四回研究大会（神奈川大学、二〇一一年一月）での報告をもとに、学会誌『ヘーゲル哲学研究』第一八号（二〇一二年一月）に掲載された評論を補うものである。報告と評論では、権左武志『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』の第三部しか扱うことができなかったが、本稿では、第一部と第二部をも含めて、その全体を扱うことができた。